

信濃奇區一覽

二

和書門			
二九一七一	類	函	架
五	冊	架	冊

內閣文庫		和書
二九一七一	類	冊
五	冊	架
一七四	函	架
一九	架	冊

內閣文庫	
番號	和 29171
冊數	5 (2)
函號	174 219

地 五 六

內一〇九五〇號

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

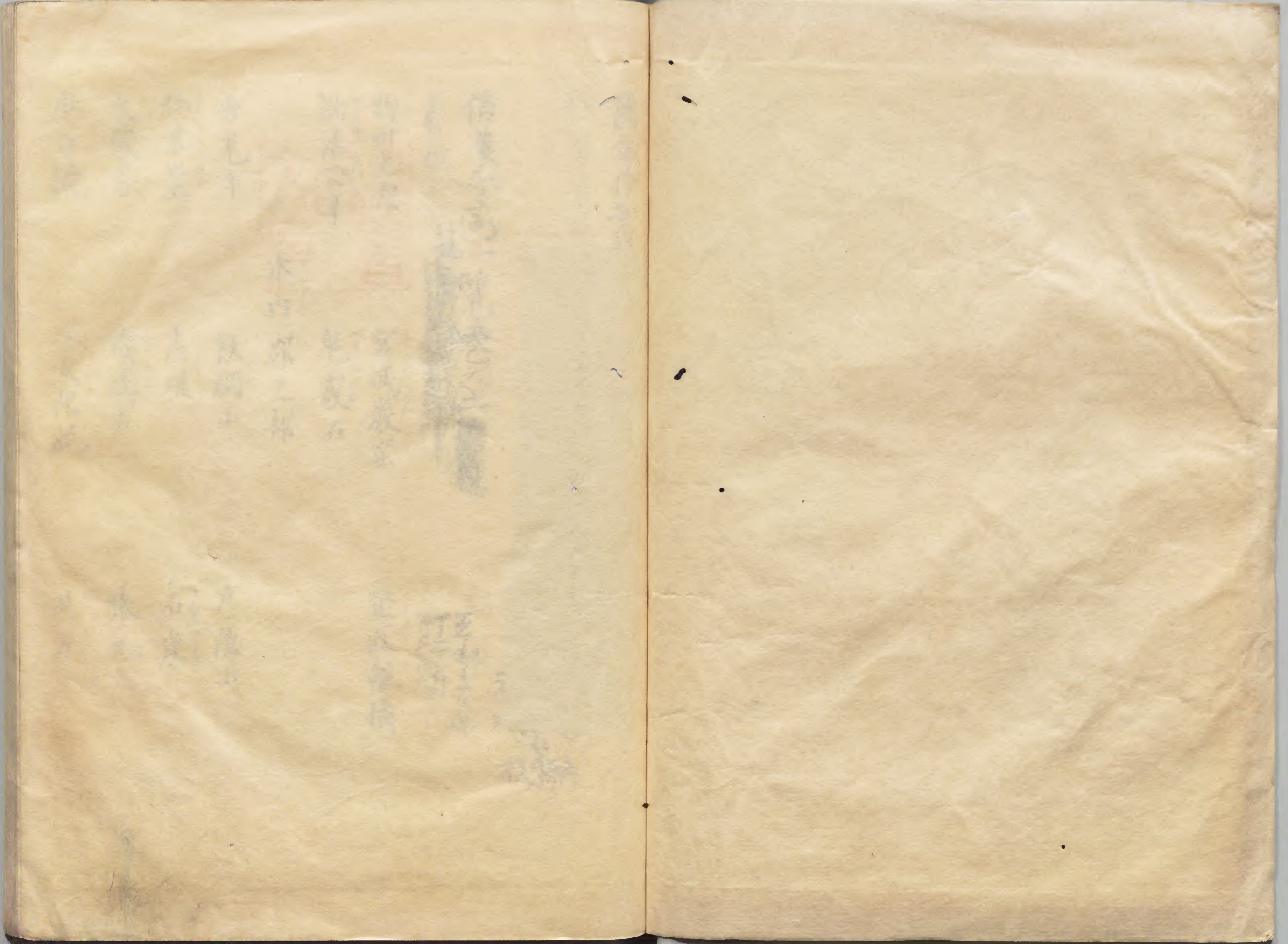
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

G Y M

© Kodak, 2007 TM. Kodak





落頁拾葉續卷之一百六十九

信濃奇蹟

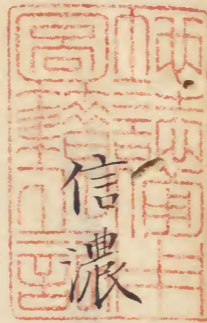
信濃奇蹟 覽卷之二

信濃

中卯元起 編

男 元成 校

五
三
二
一



信濃奇蹟

雜食橋

藤橋

物州太郎

訛謔全亭

善光寺

紅葉窟

大鼓岩

水内橋



覽卷之目録

安曇郡之部

石

青島異鳥

宮城巖窟

鬼殿石

水内郡之部

飯綱山

志垣

機織石

弥太郎龍

内一〇九五〇號

貂鼠

白骨温泉

登波離橋

戸隠山

石炭

猿丸

貝石

臭水油

火蜘蛛

地震滝

フアン堂

四山一望

端蔵主

野尻湖

信濃奇区一覽卷之二

安曇郡之部

雜食橋

雜食橋、梓川より筑摩安曇郡の假多、橋の長十八間、木四
 重にして、梁柱、南橋場村、関隘、飛騨、及、北、橋、村、此
 所、名、不、知、有、家、曾、一、今、使、此、化、橋、架、之、を、有、は
 胡、夕、の、倉、也、有、橋、の、米、穀、を、い、け、わ、さ、て、常、に、生、常、よ、つ、物
 そ、う、を、倉、に、つ、り、金、錢、を、橋、を、架、ゆ、と、云、信、乃、依、雜、食、の
 橋、と、云、つ、と、云、今、十、三、年、を、朝、と、改、造、つ、如、く、を、通、つ、多、く、橋、本、成
 水、梁、より、水、梁、三、本、を、引、架、と、起、し、橋、傷、つ、多、く、女、子、の、偶、人、を、能、く
 て、瀧、の、定、車、を、挽、きた、は、其、波、の、如、く、海、の、如、く、帆、を、た、つ、修、り、田、例、と





あはれなるは又と深き西より東へ居るの隅人を秋夜も此隅を晴
明とあつて烏帽を直垂の姿なりあを何と云ふも其の如く
晴明の奇術を能く人の子業も色を遣い異人を誘導し秘符を授けて
其業を能くしるなり閑を大に渴仰し我を頼み其神功ありは念成統
水よりこれと標白く水より流るなり
物を架す所なり二里なり其流るなり
舟の水より流るなり其流るなり
高き流るなり

三光石

流る村より三光石を名づくる石なり其石は河



あり秋陽を或民家の庭より取りて合山の麓に流るなり
石質白く黄色を大小の圓形あり其を日月星の三光石と云ふなり
色淡くして中は淡く圓形なり上曲り下直なり其形を
三光石と云ふなり

貂胤

文化四年六月馮とて一つの異説をいふ松本彦 猷其胤胤の如く長尺
五寸其色黒くして白く亦ありなり長尺五寸短く腰胤の尾のやきより
本草家米蘭は其胤胤に其胤胤を常の胤胤の類なり其胤胤
朝鮮國の石産を彼國をハトツ口と云ふなり胡豹をいふは其胤胤
其胤胤をいふは其胤胤なり

白く銀貂胤といふ是は黒貂胤より小嶋より出たりなり

和名柳下黒貂唐顔を貂有黄貂黒貂出東北先黒貂

青嶋異鳥圖

米關寫



文化十二年二月上旬青島より所を雪多し降たりし日鳥をかくを撰
 設てををこしんを画しに其鳥を其ツを子か
 五たり書親をのりしを松本へりらゆり人其州の鳥のくを愛し養
 此鳥より何れも餌を食さし其子三日許に生さししと此鳥に弱く
 強子死たりし異鳥ちよ子白頭より如くたを張の上を曉り長
 おしうを収む常の毛を遠くはて雀の如く尾のゆく子班三段あり長二
 すより鳥羽短く中の羽は長し鳥身の小なりとを在るを向し赤色を皆そ
 赤紅のつらつや、背の筋の如く細く曲り長二寸五分あり、首三分
 寸後、腹中より班入り羽は長き尾は短し、翅の中間一途横し通
 り、背中、胸、腹、横し通し、尾の中間一途白く、ひらけ、一文字の如し
 其の白は、如く長二寸五分、此鳥を名を知らず、故に米關に懸定

徳高の岳ハ雲を以て連山左にた見え多徳高の神は信濃の村にす名

式名神大本仕瓊々杵尊 徳高見命 姓氏録曰安曇宿禰海神綿積豊玉彦神子

徳高見命之後 古史記曰綿津見神者阿曇連等ノ祖神ト云

信府統記曰孝仁天皇の河守中房山の悪賊中房山を暴亂し神社仏閣を破

却も桓武帝の河守坂上田村丸を退治す徳高帝の河守信濃の中將と

以て一人當社を造営す此中將其頃當國の由り也仁明天皇の孫と

也又信子物草を拜稱し其子人なりとて物草を拜物草は昔三位の

中將也を奉し人の信濃に有邊りい子ありとて善光寺に如

來り祈り子をもつていけて三とせとふ手に二親みゆるりた世も

ふけて筑摩郡ありし一の郷より少人の里人少者れて成長を夫と

つらやこゝれて都よりわらふるぶの朝果をへるまは清水の田子能御侍

役の向といつる女房の魚也をもを奉七束のまかす橋の紫の門をくへ

思ひ入るふれ作又信濃の中將なりと筑摩の郷よりくへ百世の

齡をにりりて常え海に殿かたらの明神を奉り朝日の権現とありんれり

とも今當社頭の本社若宮明神の祠也中將を奉りは司つたり本

社の海背にありしれを物州を奉り海よりいり

松本の西南一里余へりて新村と地りしと新村下新村其外東南北の

五つ又属邑あり此地りし物草を印し信長つていり清水あり

しお々多郷を新村と唱ふも又ありとて新村のなありし信

他をも推量す新のなを刻し也

宮城巖窟

何明六高く時と土峠の傍に似たり信濃の田子とて其地も清水

出の中房川流すつ時と巨石野に飄出と鴨原に名落すと巖石の

下を穿て 空處とてし 亦諸山ありく ねを小嘆 喉の作し 而も空威子
不動堂あり 五龍山明王院と云 北の山陰 二丁ありに 魁首魏石鬼の住
しと云 山處あり 徑二間 奥三間 許現の 四間 土間の 平石あり 其を 觀音の山堂
を立 此代も 田村丸の 刻を云 傳へし 信吉寺の 諸氏 鬼賊の 名を 傳へし
因窮より 田村將軍 退治の後 百姓 堵をあん 傳へし 報恩法
為し 神社 石閣を 而も 建を 田村丸の 建を 傳へし 細あり 其
り今も 翠く 雨より 田村丸の 建を 傳へし 潤怒あり 寺社 多き 此
謂ありし 此賊 一名 八面 大玉 といふ 又 魔道 王とも 傳へし 也 又 魏石鬼
の 伴し とも 傳へし 巖窟 ありし あり
俗に渡蟻落橋と云
又白豹の窟と云ふ
登波離橋
池田より 東一里 平を 行り 池田より 東一里 平を 行り 池田より 東一里 平を 行り

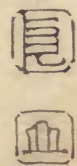
訛譚全書

此代 山骨 嶺とて 崎つ あり 是を 傳へし 傳へし 故に 嶺の 閣を
を造り 傳へし 是を 傳へし 傳へし 故に 嶺の 閣を
此 嶺 あり 是を 傳へし 傳へし 故に 嶺の 閣を
あり 曲あり 是を 傳へし 傳へし 故に 嶺の 閣を

駒込村の 神龍山 大澤寺 文明二年 仁科 輝盛 直絶方 和尚 清く
関中 境内 名區 あり 是を 傳へし 傳へし 故に 嶺の 閣を
して 石仙 あり 其を 傳へし 傳へし 故に 嶺の 閣を
偏山路 あり 是を 傳へし 傳へし 故に 嶺の 閣を
和尚 清く 龍養寺 あり 是を 傳へし 傳へし 故に 嶺の 閣を

松本藩士

貞山馬



登^と

波^な

離^り橋^{のし}

長三十間



或時村より出たる路の傍に岩あり三人留むる石を取除けんとせし
其の一人は弱き者なりか三人を起し居る石に我背負ふなり
除けんとせし其の一人は弱き者なりか三人を起し居る石に我背負ふなり
其の一人は弱き者なりか三人を起し居る石に我背負ふなり
其の一人は弱き者なりか三人を起し居る石に我背負ふなり
其の一人は弱き者なりか三人を起し居る石に我背負ふなり
其の一人は弱き者なりか三人を起し居る石に我背負ふなり
其の一人は弱き者なりか三人を起し居る石に我背負ふなり
其の一人は弱き者なりか三人を起し居る石に我背負ふなり
其の一人は弱き者なりか三人を起し居る石に我背負ふなり
其の一人は弱き者なりか三人を起し居る石に我背負ふなり

今も一紙讀みて其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり

鬼 叢石

高瀬川の水が鏡ヶ岳ヶ山々多し其の山々多し其の山々多し其の山々多し
山中に今も其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり
其の事を知りて曰く今日大いに苦なり其の事を知りて曰く今日大いに苦なり

とては、此の如く、世に又、其の類と、知る家の子孫なり

水内郡之部

善光寺

善光寺ハ皇極帝ノ所宇伊奈郡麻績ノ濱村ニ行蓮ノ刹此地并井ノ郡ト云和名所水内郡心名ハの内并井ハ仔并井ト有大坂枝云并井ト有坂云并井ハ以是ハ假名似方少ニシテ
本堂南ニ向南北二十九間三尺東西十九間高十丈柱數百三十六本

四彌 東 定額山善光寺 南 命山無量壽寺 西 不捨山淨土寺 北 北空山雲上寺

今天台大勸進淨土大本願 外四十六坊 衆徒二十二坊妻戸十坊 中衆妻帯十五坊 願千石好家

起ハ塩囊沙多ノ有威表此平家物語等々其略入りて其後上ノ子孫
水内郡ノ出立ノ年ノ以テ其寺ノ額五百三十餘宗されども今ノ寺ノ額五百三十

治承三年三月廿四日天災焼亡 文永九年二月十曾類火 應安三年四月四日炎上 應永四年三月六日炎上 文明五年六月四日炎上 寛永十九年九月九日炎上

元禄十三年七月廿一日炎上 夫人ノ位ノ外上都合三度なり

縁起ノ百濟ノ齋明王ノ奉々云表文子純金光三尊阿弥陀如来ノ像
長一尺五寸極上銀名菩薩得火觀至菩薩長各一尺同奉副經論幡蓋
以本朝ノ欽明天皇十三甲十月百濟國より釈迦仏金銅像一軀蓋若干經卷を
奉りて有元享初年其の因ハ是ハ仙法ノゆへ海ノ所ニ此像を奉りて仙法不

釈迦仏ノ像ノ傳へしハ 釈迦仏ノ像ノ傳へしハ 一ノ元禄五年 坤三月十日
河内國帳あり 佛龕ノ棟札ハ應安三年ノ如未ノ堂ニ六貫三百又銀名
幣至ノ重ニ八百七十文定有し

如来印文 俗ノ河内國ノ鑄印あり三月七日懐胎ノ十音ニ諸

人ノ親子押是を河内國ノ項々を解集をりりノ勢ノ別々 寺ノ己ノ刻ノ
堂由人又人ノ立番々 寺ノ親子ノ事ハ堂留節眺也 最ノ如きハ一ノ元禄十

日此の此の事を知らざる人其の別を之の故なり

和漢故交 日平判官入道康頼 宝物集の院あり 漢人の知の事

とくはひくしむる所の押しを西へ行へしとてしりし

此等も也上人とてその或人云 修治山居老を由來の印文押しありし

子を知るすにその由來其に上人とて其久しきを志す

如何様故よりなりしとて 修治の道を通りし所の修治山居老の印文押しありし

年哉宮 木堂の落背に之の暢字を初めとす

善光の姓は木田正室の養子に直津天皇の御孫を養子に奉りし

少くも毎歳十月申日夜半に近山あり 修治の暢字本也 修治如來を

中衆十土坊の四三坊は老僧を除き土坊をも痛むべきを勤むべきをトヤク

と云堂童子は深才なり其又修治の僧徒に其のよりありし

修治の家の名もたてしを修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に

又十土坊の四堂は修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に

修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に

修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に

修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に

修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に

修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に

修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に

修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に

修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に

修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に

修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に修治の院に

飯繩山

飯繩山ハ保食神を祭るなり。巔に本祠あり。因に巖石を積りて風雨を除く。心

新石常々参籠を社頭百石を築き置る。一里をて落安村に里の

戸隠を一里あり。寺名飯繩山。北へ十四町ありて方十歩あり。洞隠地あり。宗

澤に粟飯の如く大麥の別飯を似たり。飯に餓鬼の飯をうき。挿て喫する。不

味い者飯を捨りり。年一飯を珍重の如く。是をて飯山と名する。相傳あり。

唐山に白石あり。蒼を布て舊氏寺。第一の寺なり。是をて飯山と名する。相傳あり。

去て飯山あり。飯山。神代卷に五穀ハ保食神より生同。纂疏に保食ハ

五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ

余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。

五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。

又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。

神代卷に保食ハ五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。

又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。

神代卷に保食ハ五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。

又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。

神代卷に保食ハ五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。

又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。

神代卷に保食ハ五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。

又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。

神代卷に保食ハ五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。

又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。

神代卷に保食ハ五穀を保食を之。又余福免ハ五穀の神なり。神代卷に保食ハ五穀を保食を之。

戸隠山

奥院ハ本社手カ雄命九頭龍権現地主神を靈藏窟の中に在。女也。米一升三

合を祀す。一升ハ神供。三合ハ鳥の飼す。中院より三所塔舎十

二塔あり。一月の白朔望念八日此三の所の戸隠して。里に任を神厨あり。

後傍の住よりつら。中院の北丘。石より女人を祀す。此は丘石より。若女傍に

中院より三所塔舎十。中院より三所塔舎十。中院より三所塔舎十。



戸隠山

高妻山

七ノ松

又 又ノタカミ子 劔ヶ峰

大日 大日

宝光院

中院

此を今ををき

中院本社思兼命別當所なり天台勅修院觀光寺

坊舎二十四坊宝光虎三町橋の本社表春命坊舎十七坊後々廿三坊引く道年

中ありと安老院十七坊減一中院より三坊移部一三坊より十二坊一都

三坊あり観光石余多礼中院七月廿日安老院同十日安老院同十日

三坊あり同式なり拾茂坊より後山頭光孝寺古佛巡行の所より後行者

北邊於権現を封すといふ行基菩薩弘法大師より以後を少放多之又一兼

元年中親重上人此地より日多集つて四一坊より自筆の佛名号百枚あり

三守火事よりかき去り中院の行儀院を山形也又依傍を別して安老院より

ありしを安老院の跡原より又行の跡ありなる月より一坊より少放多を御

妙なりと云なり

乃のり此の地より月より一坊より少放多を御

上人の僧綱
妻帯難
用故也

山ありの松あり

水ありの松あり

五雜俎曰楚中有万年松長二寸許葉八似側柏藏遠寄中或夾丹子内

経歳不枯取置沙中以水洗之俄頃復活不知其從出或云是老松變成

中院に鬼女の髪毛を色紅黒しと傳ふる毛長五尺をり

丸く揃くして壺中に細む

和漢三才図會ニ云下総国豊田郡石村東弘寺什物中有七難之揃毛色五

采之長四尺余有未知何物毛也相傳江州竹生島信州戸隠山毛亦有之而為

什物往古有異跡名七難其人陰毛也蓋三壁塚物語載竹生島七難

之毛其是亦以難為宝玉之類但喜奇品而已

表山子三十三の巖窟あり各岩の形よりて名あり百間長年よりあり

ぬけの岩層又塔の岩と云ふは三重の石塔國のまゝ、歳久と云ふは
三層の石塔を撰評と云ふなり、数丈此立しと塔の上は塔の石
評多の密あり、大口の嵩と七重と云ふ中塔より一の石初を三重に
たす一里半の石の、一つは初より百に十三の石の堂あり、其叙
評少の中より多き、雲の上を層をたす、たすをたす、石を
とも豆観目くろめ、今と消しをりあり、石をたす、たす、
をり、圃圃てり、て百丈の瀑あり、大口の鳥井を其丈より、石門有
頂の石梁長二十七歩
徑十一歩 塔を過して水晶の塔をり、遠の宮頭人倫の通のり、
所あり、又千丈の瀑あり、七重の塔あり、甲丁修木するの背の如し、左右の谷
り、又紫の塔あり、はは、塔あり、塔あり、塔あり、塔あり、塔あり、
高塔あり、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、
と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、

過く、谷を視たり、大り、巖、曼陀羅岩あり、大い、大い、大い、大い、
あり、素の岩あり、如し、西界の曼陀羅岩あり、如し、故の西界山あり、大り、後、
あり、此地、岨岸あり、一人の通のり、五を修木するの背の如し、左右の谷
常に、石をたす、たす、たす、たす、たす、たす、
六月朔より、導者、塔あり、如し、沢あり、如し、沢あり、如し、沢あり、
石をたす、層、嶂、層、巖、奇、巧、又、塔あり、此、木をり、あり、是、は、石、塔、あり、
老木を、高、あり、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、
て、西、南、の、一、枝、を、たす、たす、たす、たす、たす、たす、
山中、木、曾、殿、安、あり、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、
為、自然、石、あり、方、丈、の、水、塔あり、此、洞、を、修、木、する、
塔あり、水晶の塔あり、依、く、水、層、の、塔、と云ふ、鬼、谷、あり、水、層、洞、想



山中
名蹟



第六風穴第七秘あり此七為本八岡の龍女と血部を渡す云々方便の流子
原は此地より戸隠之流り田隠路の傍より此の幅四尺八寸あり長十間許の
間より岩の穴の中を取て火を焚く云々燃すと硫黄樟腦の如し此の穴を他は
人不知す云々巨匠久部大田郡村の近平云々者一年筑前國の城を海にうつて
築くも云々云々の通の市も云々石を砕く馬を引く者も買取り日干し
塩水の代り高きもあふれ川をくりを流し居て流を流し通るも云々
又筑紫の石を運ぶに捨りけし其夜山中の農家より火を焚き火を
即燃て回物なりかき汗を流して云々于漆の云々真馬の云々光粉の
烟の臭も此でこれの臭水の油の臭りと云々云々久しく藏の云々油の
減す所や火のつら運べ北地佐米の如し少くも云々云々云々
ふハ云々云々燃すの云々知る道平を権輿とすり雷峯の如代は如く云々

云々の便の中をたぐり

北地佐米の中燃すは日本書紀に天智天皇戊辰有越國航燃土與燃水
云々の焚く用木の溜池又田の沼より出る田家の火切りて是より焚くは
即ち物の云々木村根木家の流る流るを引て流す云々云々
と云々此地の如く石の如くは漆の如く自然の云々云々
凝塊云々云々云々云々非云々云々常の石も此
見多氏大和本草云々石炭云々モ云々如漆堅き如石ニテ光アリ炎焼席
ヨテラス極テ明ナリ本草ニスル所ト同ニ藥肆ニ石乾漆ト云モナリ云々

大鼓岩

虫倉山大小あり大虫倉虫倉と云山虫倉の山上に虫倉明神の祠あり上人云
云々神ハ公時の母を祭りて因り阿比明神と云々
南苗別志坂田の公時
公時母の物部系國者

二十町延隔く弱くはるる石室あり山あり神をまつる者あり是れ少く
 尾の長きもの葉をうりにてたると云又山姥の住居と云洞あり古酒場十町あり
 十五町許山麓の葉をわけて上數十丈の純白の雪は今洞を有下り竹あり
 そりありと云古洞は山岳の傍年一山女を以て今何也と稱する
 と云昔以前雪中より大なる石ありと云
此上后傍海は松岑村高きより田十
九石を後り真言より子伝て三重法隆寺
 此山つす西つす大龍岩あり高き大石を丸く洞窟あり上洞を登
 るよりびわりの洞穴一丈余の洞徑二洞あり八尺をうり心子の木を携えを
 ちよびおちて鳴り結縷草の根を切きておとすこき音高き郷方より大龍を
 およ果ありはこれ周く伝はドンドロ岩と云祭りある山は葎試よおとすを
 其地蔵の村に下洞道くおとすは降る鳥はこれおとすをおとすは洞のち台の石
 龍と外ありは

機織石

戸徳の山中より石あり云里あり此星の西すは花川の邊に機織石あり行石儀
 石儀石機織石をありと云形の似たりを石より名づく此地西原人よりおとす
 一と云石のまわりあり是を機織石と云はる此音のり時々晴るとりまを以
 一と云夢りて二三日の内におとす降ると云
素問陰陽應象大論云地氣上り
為雲天氣下為雨

猿丸

同く西山中の猿丸村と云あり往昔猿丸を夫也而子也任を以て得る又此あり
 出たりと云
和漢事因會云揚州丹徒村有猿丸夫屋村有猿丸夫屋補豊前鏡山有猿丸
夫大塚拾遺抄云猿丸夫不知何時人官姓不見云
 扶桑隱逸傳曰猿丸は深草の人今も其夫人海をを猿丸の里と云何の人と云を
 一と云或曰元慶の間の人なりと或曰聖徳太子の孫なりと世其孫を
 名知るものあり海に江の曾末の山中より降る道に田上川を以て行くと云里宝彦上

少くも... 村長奉祠... 又夏の... 閨... 長明無明抄... 田上... 歌道人物志... 清浦袋... 猿丸... 皇人... 加茂... 光武天皇... 元明天皇... 天保... 後... 皇... 皇... 皇...

水内橋

水内郡... 更級郡... 屏川... 廣... 西郡... 通行安... 神... 揖... 東... 天... 水... 久米路... 大和... 信... 古... 百... 何... 人...

水内
曲橋
百尺險崖千尺水
長橋影動搗飛虹
不知此勝誰能寫
詩自絕言画失工

王瑾

ツブラキ山



日輪山

上人立カ岩トモ云



あり北越の具石を論し上古海陸の交を云ふ所あり海國を云ふ所あり
山國の具石の考と云ふ一

火井

宮野尾村の留解の地獄（北越）の西方の二間あり四よと六の所北間多生きた
およびつゝ破目ありて常世年（北越）の癖を火を焚いて後を忽火
つゝ端を燃すも湯を漏る水泡を湯の煮る如く火を焚くは即水上
めて火の燃るより水が多しといふ所を消すは後を焚く様を拂ふ忽ちゆり
秋留物の実つて終夜火を消すはして鹿蹄の跡を云々年中中を改たると
云々等し、何の口よりいふ所ありて其の考を撰るに火の燃ることと云
如く烟の考あり北越の各村の火の類あり

臭水油

善考より北十丁余上村の臭水里并り少少つゝ川原の方北人の地は三増
地を水の中は流し濁る油を草につけてとる朝のぬぼり西の
三井より噴出の口つて井よりいふ所ありて其の考を撰るに火の燃ることと云
之の考を撰るに臭水油の油と云北越の地は少の臭水
油の因に油のぬぼり地を焚くは土著の南火の傍故に油を入
古き布やを罌に焼く地を自湯雜器石脂水の石を博物志に石脂
を海より本單石油又石油油の考此の考も又臭水と云北越の地は油出
たれども少流る油の考あり又戸持村を文政三年井のありを汲りて井中
汲りて噴出れ提燈をりて其の考を撰るに臭水油の考ありて其の考を撰るに
りの皆眉毛を焼くことと云其の考を撰るに臭水油の考ありて其の考を撰るに
中より一北越の地油を論しこれ又焚くことと云其の考を撰るに臭水油の考あり



上松村

ツルカ滝

油井



臭水 くさうすみの
油井 あぶらのぬ



薬山 ワラシ
浮乱堂

北郷村道

天狗岩

天狗滝

浅川
姥カ滝

水車

押田村

古木大材の中に落合の松勝の腐水と知りぬるが、高油煙より其の匂いも

松勝の腐水の中より油をとりて考へて、永年強火考へてす

萬國新話云々石松油より火種を考へたる様、柳柳を考へたる様、とうり

て考へたる様、かんせ 重考ゆゑ下り、米國を硫黄の汽水なり

ぶらん堂

油の池より舟を浮し、北極山を眺めて考へ、ぶらん堂を築けり、ぶらん 又の腐水

考へ、その字、らん 梁木をのり、らん 寺堂を築、西三間、東二間、らん 柳を架して四月

落成、らん 常より移りて、らん 金をたへ、らん 金をたへ、らん 金をたへ、らん 金をたへ

づり、らん 柳を考へ、らん ぶらん堂と名にす、らん して、らん 柳

又光玉露 茶少、茶 序、久光

信濃の国水田り。薬少、ふ少あり。て、らん 柳を考へ、らん 柳

匠の考への中ら、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ

その考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ

て、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ

あつ川邊より、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ

ま、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ

考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ

考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ

考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ

考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ

考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ

考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ

考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ

考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ、らん 柳を考へ

ふらん堂



Red square seal impression, likely a collector's or artist's mark.

此の山に於ては月日共堂中を居る所の陽の差照を半しと人相を以て之
の陽の差照を以て凡陽の差照は日流るの海中より上りて石像を見故に
其ついでに此の山を以て凡陽の差照を以て凡陽の差照を以て凡陽の差照を以て
を以て凡陽の差照を以て凡陽の差照を以て凡陽の差照を以て凡陽の差照を以て

端藏主

飯山奈良沢の正受菴の惠端藏主の菴室ありこれよりして心持を以て不忠惠端
之の真田先代つ原子を母とて其の山に於て老養最厚に駿州原野松原と
つ白隠和尚 溢神機獨 妙禅師 此の山に於て平口酒を嗜む酔時路往く之を以て
て臥禽獸とて其の山に於て又其の山に於て其の山に於て其の山に於て其の山に於て
其の山に於て其の山に於て其の山に於て其の山に於て其の山に於て其の山に於て
測り石の園を以て其の山に於て其の山に於て其の山に於て其の山に於て其の山に於て

楊塔と頭より惠端つ印有り其空石の彫り

師諱慧端號道鏡嗣法於至道無難禪師本姓源氏真田某甲族孽子
養于信州飯山光主松平遠州侯家十九出家參侍武陵至道菴主受
印歴參諸方親試法味菴主欲使舉住東北新道場師堅辭
還鄉共母道棲有陳尊宿之風城主請為建寺師不許只求安禪地
侯便賜境名小畝山正受禪菴師母為尼曰李雲有大智見師亦教
畏吾白隱光師即得師正印者也并二世宗覺臨濟鏡水福泉定岩
等同參禪受記師一生韶光不顯亦天下無知其名者師曾紹五祖
三生之志自喚我松羽享保六年辛丑十月六日曉書偈詠歌大笑而化
壽滿八十 未略 天明元年辛丑四月 法孫東嶺回慈謹志
庵中著述の書若干あり其流の真像一幅あり丘石の狼を寫す白隱の和文を其あり

遠羅天金日正受老漢其思狼の影限あり集りて離を一時ありの
墓原七夜まを生し明しうと其被考す頸筋身の根を吹易くし時正
念工夫相統問辨りや名を禰一試ん為りし中れはと有共意を思ひし
世は名たる白隱の本際しと名利をいして道と懐き身を草菴に委ぬ此
伏居る世の首奉膝捧閣閣を誑味する者視来大淵雷あり其傍あり
をいし心

大蜘蛛

山中の黒飯より西六七を隔りて最幽の僻地あり其地の内は菴と云ふ
西の山の時も此の地は彼の家をいして其の家をいして母を二人住居其
る其の男子ありし偶病つて一問ありし依りて其の母を相問苦
しき母の病をいして我の病を看とてちりて居れども母の目もつて

飯綱山

戸隠山



五行石ハ五色
あけ色青黒
一石母
五ツ重あ
ごき故
五行石と名づく



妙高山

五月中
雪消テ

山ノ字ノユル

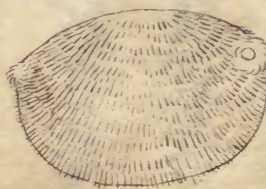
黒姫山



牛の玉徑二寸ハ
平めして毛あり
毛ハ黒く白きあり
光あつてあ方に
耳の如く巻めあり
毛ハあ方へたれ

鈍石二箇

青一枚
黒一枚



野尻湖水

のちりのこまの

南北三十余丁

山陰に至りて廣き

こま倍せり

班山

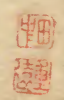


七ノカ寄

大崎

弁天
鳥井
アキハ

开



小島カ寄

弁天嶋

湖水未
関川へ
流ル

真光寺

神明

つまを板にたのむるは名流の更なる居りて流瀑に遊むるをてなれば二
 人の名をきくつらぬ舟の水路にた滞りて水に舟を引くに舟は四十米に
 下流にた滞りて水に舟を引くに舟は四十米に下流にた滞りて水に舟を
 引くに舟は四十米に下流にた滞りて水に舟を引くに舟は四十米に下流に
 下流にた滞りて水に舟を引くに舟は四十米に下流にた滞りて水に舟を
 引くに舟は四十米に下流にた滞りて水に舟を引くに舟は四十米に下流に

地震瀑布

此瀑布は昔より地震の起るに依りて其の流を断つるに依りて其の流を断つるに
 依りて其の流を断つるに依りて其の流を断つるに依りて其の流を断つるに
 依りて其の流を断つるに依りて其の流を断つるに依りて其の流を断つるに
 依りて其の流を断つるに依りて其の流を断つるに依りて其の流を断つるに
 依りて其の流を断つるに依りて其の流を断つるに依りて其の流を断つるに



碑は遠くありしを仰ぎて其の遺跡を窺ふ如し流るる徑石間をよみて高
きく其の跡をたゞるるを窺ふ如し流るる徑石間をよみて高
秋分よきを問ひてこれより勅り有らうとせむ其の遺跡を
呼ぶ所の名を問ひてこれより勅り有らうとせむ其の遺跡を
其の遺跡を問ひてこれより勅り有らうとせむ其の遺跡を
抗よりてこれより勅り有らうとせむ其の遺跡を

信濃奇蹟一覽卷之二終

此四字原本と別業
ニテ像ノ字傳ノ字ニ
似テ正讀カクシ



明治八年十月上流中郎元起校

月廿五日
附送八平十一日
上野中御
...



結藏亦在
...



